

# 太田俊雄の「愛国心」考

鷹 澤 昭 一

(客員研究員)

## 1 はじめに

学校法人敬和学園の創立者の一人である初代校長太田俊雄（以下「太田」という）が高校創立に当たって、学園名を「敬和学園」とするとともに、教育モットーと6つの特色を掲げた（敬和学園高等学校設立募金趣意書、1967.10.1）<sup>(1)</sup>。その5番目に「日本人の教育」を挙げ、真の日本人を養成するためには、真の愛国心をもつことの必要を説いた。と同時に、開校以来、日の丸・君が代<sup>(2)</sup>を式典に用いることを強く望んだ。しかし、教職員の反対にあい、式典がキリスト教の礼拝形式で行われることから、君が代は採用せず日の丸を校旗とともに壇上に掲げることで、1968年創立以降太田が校長を辞任した翌年（1985.3）まで続けられた。この論考では、太田の「愛国心教育」とその時代背景を以下に述べる。

## 2. 敬和学園の教育モットーと特色<sup>(3)</sup>とその変遷

1967年10月1日付の敬和学園高等学校設立募金趣意書には、「教育モットーと特徴」として前文に続き、6つの特徴があげられている。

「敬神愛人は、本校の教育モットーである。聖なる神に対する畏敬の念と、人に対する和合、融和の精神を育てていく。

イ 個性の尊重 各自の尊厳さと価値に目覚めさせる。

ロ 人格教育・全人教育 知識・学力を重視するが、それだけにとどまらない。個人的な接触、小集団教育を通しての、心にのこる教育。円満な人格の錬磨。

ハ 寮生活 教師と生徒、生徒同志の間のもっとも密接な交わりは、寝食を共にする寮生活によって深められる。

ニ 国際的視野に立つ教育 語学力の養成に力を入れ、外国留学の門戸を開くのみならず、将来海外にも活躍できる識見・知識・能力を養う。外人教師が、このために特に力をいれる。

ホ 日本人の教育 世界人となるためには、真の日本人とならねばならない。世界に貢献できる日本人の養成。

ヘ キリスト教主義大学への推薦入学の道をも開く。<sup>(4)</sup>

1970年発行の「学校案内」では、「へ」の項が「男女共学 一男性らしい男性、女性らしい女性を男女共学によって育てる。」と変えられた外、「ハ」の寮生活が「ホ」となり、「国際的視野に立つ教育」並びに「日本人の教育」がそれぞれ「ハ」と「ニ」にあげられている。また、日本人の教育については「日本人の教育 ——世界に貢献できる日本人の養成。真の世界人・国際人として活躍するために、真の日本人をつくる。」<sup>(5)</sup>と文言が変化しているが、趣旨は同じである。これ以降、1990年の学校案内まで同じ教育モットーと特色が続いている。

以上から「国際人として世界に貢献し、活躍するために」、「真の日本人をつくる」ことが、太田の言う「日本人の教育」であることがわかる。

### 3. 日本人の教育

「真の日本人をつくる」ことについて太田は、開校に先立って発行された「敬和」4号（1967.12発行）及び5号（1968.1発行）の2号にわたって「日本人の教育」と題して見解を披歴している。それによると「真に日本を愛する日本人にして、はじめて真に世界に貢献し、世界に愛される世界人たりうるのだと信じるからである。独善的な日本人をつくるのではなく、日本をして世界のために大いなる貢献をさせるような人材を育てていきたいからである。したがって日本人をつくることこそ、わたしにとっては世界人をつくることなのである。」<sup>(6)</sup>「敬和学園の生徒に、日本人としての誇りと、感謝、そして責任感をもたせたい。そして将来、世界中のどこに出ていっても卑下することなく、おもねることなく、堂々と胸をはって活躍してくれる」<sup>(7)</sup>人物に育て上げることである。

#### (1) あつものに懲りて

太田が、このように言う背景にはいくつかの原因があげられる。

その一つは、1962年の夏、北アイルランドの首都ベルファスト市で開催された〈世界キリスト教教育セミナーおよびインスティテュート〉で黄彰輝博士の〈世界の八不思議〉発言であった。黄博士は、〈第八の不思議〉とは、「〈国民に愛国心を育成しないどころか、愛国心という言葉さえタブー（禁句）にされている国がある〉という現実である。〈愛国心〉を口にすれば、反動主義者だという烙印をおされる。日本は過去の失敗にこりて、いわばあつものにこりて、なますを吹きつつけている。それが日本の現状であり、こういう国が存在していることは〈世界の第八の不思議〉である」<sup>(8)</sup>、と力説した。「世界八十二カ国を代表して集まっていた三百数十名の人々は、おどろきの表情をもって聞き入っていたが、それは〈愛国心〉を育てようというけんめいな努力をしていない国がある、という事

実に対するおどろきなのである。」<sup>(9)</sup>

太田は、ベルファストの会議の途次訪問した、スイスの友人マルチンとのアメリカ留学中、マルチンがスイスの政府あてに国防費の税金を送金するエピソードを枕にして、黄博士の発言を書いている。<sup>(10)</sup>

太田が黄博士の言葉に自らの思いを託していることは言うまでもない。それは「過去において、軍国主義者たちが失敗したのは、〈日本は世界のため……そしてすべては神のため〉という信念を欠いて、独善的な進み方をしてしまった」<sup>(11)</sup> ことにあるのであり、逆に戦後は「あつものに懲りてなますを吹く」ように「愛国心」という言葉すらタブーとなり、かつ「現存の社会情勢の中で、… 国際人たらんとして日本人たることを忘れるような傾向に、人々が走っていること」憂えているからに他ならない。

## (2) 在米一世たちの熱情

第二にあげられるのは、在米一世たちの「燃えあがるように熱烈な祖国日本に対する愛国心、祖国の繁栄を祈る心、祖国の将来に対する憂慮」<sup>(12)</sup> である。

「日本国民の中には、もう愛国心などなくなった、といわれる時代に、異国の地にあるこの一世の方々の中に、それは燃えあがっていた。それは、わたしには全くうれしいおどろきであった。その方々の多くは西海岸で何十年もの間、実に耐えがたいような重労働をかさねて、やっと獲得した地位、身分、そして土地や家屋の一切を、あの第二次世界大戦争のため、敵性国民という名のもとに没収されて、いわゆる『キャンプ』に収容され、言語に表わしがたい程の労苦の数年をその収容所ですごした経験者であった。

戦後解放されてから、必ずしも西海岸に帰らず、シカゴやデンバーその他のところに新天地を求めて行き、再びゼロからスタートして、それぞれの道で生活の基盤を築いて行った…… すご体験を聞かされるたびに、わたしは心の中で泣いた。そして、この詩<sup>(13)</sup>を思い出した。嬉しいことに、在米一世の方々の中には、この耐えがたい程の虐待・労苦に対しても、復讐心も呪いの念もなく」<sup>(14)</sup> 「戦後の日本に教育がなくなったことを憂え、教育がダメになったことを憤り、日本人の教育を何とかしなければ、国際社会からしめ出されてゆくと焦りつつ、日本のために祈りつづけている人々」<sup>(15)</sup> との出会いであった。

彼らはなぜ、日本に教育がなくなったと直感し、教育がダメになったとわかるのかといえば、「戦後ぞくぞくとアメリカに渡る若者たちの群れを見たからである。」

その一例を太田は次のように記している。「非難的的是小田実の『何でも見てやろう』式の旅行者が、日本からゾクゾクとやって来る、ということだ。言葉もロクロク通じなければ、エチケットも心得ない。旅の恥はかきすて、と来ている。無銭旅行と称して、旅費も持たずにやってくる。それが言葉がよく通じないのだから、しぜん一世の日系人のとこ

ろへ泣きこんで来る。同胞のよしみで、と思って、それでも真心をつくして接待にこれつとめる。衣類も買って与える。洗濯もしてやる。小遣錢も与えれば、旅に出ては先だつものは金だからと、何がしかの旅費も用意してやる。ところがその不作法なことお話にならない。「ただただあきれますねエー」とあるご夫妻は、口をそろえて言われる。それでまた旅に出たらもうそれっきり。ナシのつぶて、というが、はじめの折には心配なものだから、行き先へあてて困ることはないか、元気かと問合せみたが返信が来ない。何ヵ月たっても何の便りもない。どうしたことかと案ぜられるまま、日本のお家へ問合せの手紙を出してみた。やがて「宛名の者は見当たらない」と附箋して返送されて来た。それではじめて偽名を使っていたのだ、とわかった！」<sup>(16)</sup>

次には、逆に在米一世が見た日本の状況を紹介している。

ハワイのキリスト教会の〈大久保彦左衛門〉と自他ともに認めている渡辺次郎氏が寄稿した文である。「同氏は『神を信ずると自負するキリスト者は、一般国民にさきがけして、信仰を実践によって実証し、最高級のパウロ的愛国者として、範を世に明示すべし』と強調するクリスチャン愛国者である。」<sup>(17)</sup>と前置きして「一般的に日本人が薄っぺらで自主性のない人真似しで、秩序を無視した見栄坊のゼイタクやで、近視眼的な生活の半面がつよく目につき、いらざる憂慮をよぎなくされる次第である。」<sup>(18)</sup>

これを太田は〈後進性の表れ〉と捕えた。「後進性の特徴の一つは、島国根性、閉鎖性である。視野が狭く、物を一方的にしか見ることができない。自己中心的で、分かち合う喜びを知らない。よその人を尊敬することが出来ない。よそ者呼ばわりをして、排他性を発揮する。」<sup>(19)</sup>

そして〈後進性克服のいとなみ〉が教育であるとして、「外国に行つて見なければ、ほんとうに日本がわからない」し、「井戸の中の蛙は大海を知ることはできない。」生徒を外国から日本を見させること、留学生を迎えることなど「国際的視野に立つ」教育の必要性を訴えた。

#### 4. 真の愛国者

太田は、真の愛国者とはこういう人だとして、古川高等女学校の校長の言葉を記している。「太田君、きみはクリスチャンだそうだねエ。ぼくは俗物でキリスト教信仰には入れないが、クリスチャンの方々のきびしい静けさというか、静かなきびしさというか、あの純粋な熱情に、ぼくは満腔の敬意を表するね。忠君だの、愛国だのとやかましくさわりどる連中が、うようよしとるが、本当の救いとなり、日本を滅亡から救う力となるのは、ぼくはいわゆる軍国主義者どもではなくてきみたちの、静かな、純粋な、きびしさ、熱情、そういうものだと思うな……」<sup>(20)</sup>

彼は、「大東亜戦争に突入する二年前の昭和十四年（1939年）、日本国中がキリスト教を誤解し、非難しているかの如き状況の中で、クリスチャンの中に、真の愛国者を見出して」いた。<sup>(21)</sup>

校長の言うクリスチャンの代表として太田は、内村鑑三をあげる。彼が、『わが墓石にはこう彫れ』と書きのこした4行の英文“I for Japan / Japan for the world / The world for Christ / And all for God”で有名な墓碑銘であるが、内村の「思想の中に、烈々として燃えていたのは『われは日本のため』という念願であったとわたしは信じる。そのことを自ら墓碑銘として書きのこしたことが、その念願の強さをあらわしている。」<sup>(22)</sup>

（内村鑑三の「愛国心」については菊川美代子氏の「内村鑑三の愛国心」<sup>(23)</sup>という優れた論文を参照されたい）

太田は、もう一人、藤井武を真の愛国者としてあげる。

「内村鑑三の愛弟子、藤井武は、1930年7月に「亡びよ」<sup>(24)</sup>という有名な詩を書いたが、その中で

『青年は永遠を忘れて、鶏のごとく地上をあさり、

おとめたちは真珠を踏みにじる豚にひとしいことをする……』

と、悲憤の涙をしぼりつつ叫んで、日本の将来の破滅の幻影がぬぐい去れないと言っている。そして、その詩を『ああ主よ。みこころをなし給え』と結んでいる。

彼が現代に生きていたら、果して何と云って悲しんだことであろう！ 悲しみに、あるいは発狂してしまったかも知れない。

親も教師も、また本人も、あそこは有名校だ、あそこを出れば上級学校への進学率がよい、卒業すれば就職率がよい、昇進率がよい、よい縁談が……と、けんめいに「鶏の如くに」地上をあさっている！ これが教育か？ 教育制度も、設備も充実しつつある。しかも、皮肉なことには、「真の教育」は姿を失ってしまっている。これを復興しなければならない。そうでなければ、個人も民族も国家も亡びてしまう！」<sup>(25)</sup>

さらに、聖書のイエスやパウロに究極の愛国心を求める。

「1900年前のエルサレムをオリヴ山の中腹から展望し、その現状と将来を思うて泣かれたイエスの姿が、まず第一番にわたしの心眼にうつる。

『ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ、ちょうどもんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはお前の子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられてしまう……』

イエスの、この肺腑をえぐるような嘆きの言葉は、われわれの信仰の中にそのまま生き

て伝わっている。彼が、自分の祖国エルサレムの『失せたる羊』以外には責任を感じない、とまで言われた愛国者であったことを、われわれは知っている。

使徒パウロはこの信仰的遺産をついでいると思われる。『わたしの兄弟、肉による同族のためならわたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない』とまで書きおくれたのは彼であり、彼は『大きな悲しみ…… 絶えざる痛み』をもって、こう書いたのである。(ロマ書9・1-3)<sup>(26)</sup>

太田にとって、根本に〈唯一絶対なる神〉に対する畏れをもつものが、愛国者になれるのであった。

また、太田は卒業する生徒に次の言葉を送って「愛国心」の根本を説いている。

「主を恐れることは知識のはじめである。(箴言1.7) —— 現代の一般教育の中で致命的な欠陥は、この主を恐れるところを養わないことにある。神に対する畏敬の念を養うことこそ、われわれの願いであり、祈りである。敬和学園の敬はその祈りを表すということは、折にふれて力説して来た。」<sup>(27)</sup>

太田は、当時タブーとされた「愛国心」を意図的に「敬和」紙の「太夫浜卓話」で論じているが、表立っては「愛国心」を使わず、「日本人の教育」として、太田の信念・信条を貫いた。

## 5. 愛国心と日の丸

### (1) 経過

「はじめに」にも書いたが、「敬和学園高等学校」の開校に先立って、開校式並びに入学式に太田は「日の丸」を掲げ「君が代」を歌うことを強く望んだ。「合衆国において、星条旗を掲げアメリカ国歌を歌うことは、公私立を問わず当然のことであり、いずれの国においても同様である。」というのが太田の考えであった。しかし、これには地元の新潟の教員(予定者)から反対が続出した。というのは、1966年に戦前の「紀元節」にあたる2月11日を「建国記念の日」としての法律が定められ(1967年から施行、多くのキリスト教会では「信教の自由を守る日」としてこの日を現在も問題としている)、続いて「靖国神社国家護持法」案が大きな政治課題となろうとしていたからである。キリスト教会にとっても自らの「信仰と政治」の問題に直面させられていた。深夜に及ぶ激論の末、「(開校式)も(入学式)もキリスト教の礼拝であるから、(君が代)は歌わず(讚美歌)をあてる。(日の丸)は(校旗)と共に壇上に掲げる」との妥協が成立した。

「太夫浜卓話」をはじめ、太田の著作には、「君が代・日の丸」についての記述は、現在のところ見当たらない。「日の丸」についての記述が現れるのは、太田が引退し名誉校長として「敬和」紙に「安中だより」を連載してからである。

## (2) 「なぜ日の丸の旗が好きなのですか？」

1987年9月24日から26日までの2泊3日で行われた第18回生修養会の「太田俊雄コース」のパンフレットに書かれた生徒の質問に太田が答えたものである。これにも背景を説明する必要がある。

1984年3月、太田は創立当初の公約「1学年定員200名」が実現したことで、「役割が終わった」と校長を退き、長男敬雄氏が住む「安中」に引退した。その最初の200名学年である第16回生が卒業に当たって「なぜ、〈日の丸〉が式に壇上に掲げられるのか？」という問題提起を学校に対して行った。その問題に対して、学校は正面から答えようと、数多くの学習会、討論会を行った。その結果、16回生の卒業式から「日の丸」は壇上から移されることになった。18回生は、1年生として刺激を受けその議論を見守ってきた経緯があった。特に寮生活をしている生徒にとっては大きな関心事であったといえる。

太田は、このコースに参加した生徒の質問に丁寧に答えて、「安中だより」を2回分<sup>(28)</sup>これに充てている。その2回目が「なぜ日の丸の旗が好きなのですか？」に対する回答である。

「国旗というものは、おめでたい時にかかげるものです。日本の国旗は日の丸です。もう少しわが国の歴史を勉強しなさい。好きか嫌いかの問題ではありません。」<sup>(29)</sup>

1962年に北アイルランドの首都ベルファストで行われたホワン（黄）博士の言葉を冒頭において、太田にしては珍しく少し叱責気味に答えている。学校がとった「日の丸」の対処について太田の無念の想いが込められてもいるようである。

続けて「今の日本人の多くは、実に進歩派・進歩主義といわれる学者や評論家たちや、無神論者（唯物論者）や共産主義者たちに洗脳されているように、私には思えてならない。こういう問題は、余りにも大きい問題だから、このように限られたスペースで論議し得るようなものではない。それで〇〇君の数々の質問に答えるために、私は左の二冊の本を読んでみた。君たちもこの程度のもは読んでみておいた方がよいであろう。

阿川弘之著 光文社刊（1987発行）

『国を思うて何が悪い？ ——自由主義者の憤慨録——』

（進歩的文化人や新聞が言うように日本は悪い国か？）と表紙に問いかけています。

元東京大学総長 林健太郎著 光文社刊（1987発行）

『外圧に揺らぐ日本史 —教科書問題を考える—』<sup>(30)</sup>

どちらも1987年の著作でいずれも「カッパ・ホームズ」のシリーズとして出版されている。10年後の1997年に文庫化するに当たって阿川自身が編集者の「国を愛して何が悪い」という提案をやつとすることで「国を思うて…」と題名を変えてもらうことで著作を引き受けた<sup>(31)</sup>と後日談を載せている。

また、田原総一郎は「愛国心という言葉は、戦後驚くほど長期間、タブーのようになっていました。私がジャーナリストになってからも愛国心などを口にする人間は“反動”だとする空気が圧倒的に強かった。それが1990年代に入り、とくに後半からタブーが解けて」<sup>(32)</sup>と発言している。太田は、阿川より20年も前にこのタブーを承知の上で「愛国心」発言をしているのである。この精神はどこで養われたのであろうか？

## 6. 太田の反骨精神

### (1) みんなが右を見るときは左を見る

「敬和」第140号（1980年12月1日）の「太夫浜卓話」に太田は「反骨精神」と題する一文を書いている。

「みんなが左を向く時は右を見、みんなが右だと言う時は、敢えて左を注視せよ。これをわたしは自分の生活信条にしている。一億こぞって右を向いている時に、敢えて左を向くには、真の勇気を要する。人が何と言おうと自分の信念のままに生きる人間がいなくて、文字通り一億こぞって右を向いたり、あるいは逆に左を向いたりする時代は恐ろしい。われわれは、わずか半世紀の短い歴史の中に、次々とその恐ろしい時代を見て来た。天皇神聖説が唱えられ、天皇は現人神あらひとがみでいらせられると、全国民がその思想になびいた時代に、わたしは一人の青年教師、柴田俊太郎先生によって、『たとえ一天万乗の大君といえども』まちがいを犯されることはあり、『神の被造物である一人の人間が、天皇であるというだけで、現人神だなどという、たわいもないことを押しつけようとする軍部や為政者の愚かさ』を、徹底的に教えこまれたことを、生涯の幸福であったと思っている。

戦後、天皇の、いわゆる人間宣言がなされた時に、『陛下といえども人間——神の被造物——にすぎない』ことを若い頃に教えこまれていたわたしには、この宣言など全くのナンセンスにすぎなかった。<sup>(33)</sup> 続けて郷里の大先輩「犬養毅」の学士時代の街頭演説にかける生き様の「逸話を小学校の頃に、担任の三宅先生から何回か聞いた。『生命にかけても信念をまげない人間になれ』、『生命をも投げ出して悔いもないだけの、高潔な信念の持ち主になれ』と、先生は語って下さった。そしてわずか五年生の少年であったわたしは、それ以来半世紀以上にわたって、犬養先生のような生き方をしたいと願いつづけて生きて来た。」<sup>(34)</sup>

また、太田は以下のような逸話も書いている。

「学生時代に、わたしは、今の言葉で言えば、アルバイトをして学資をかせぎながら、古い言葉でいえば、苦学した。いろんな仕事をした中に、新聞記者——正式には市内通信員——の仕事があった。これは実に得がたい経験であった。あらゆる種類の犯罪者たちに会えた。その頃、スリ専門の刑事から面白いことを聞いた。「みんなが左を向いていたら

右を向け。みんなが注意を右に向けていたら、左を見ろ」というのが、刑事心得の初歩だ、ということ。電車の中などのような人ごみでみんなの注意が左の方にひきつけられるような時には、右の方でスリの手がのびている。と、一応はそちらに注意を向けろ、というわけだ。

現代は、みんなが新しいものを求め、古いものを棄て去ろうとしている。新しいものだけが貴くて古いものはダメなような錯覚を多くの人々が持っているようだ。こういう時に、古いものの方に心に向け、古いものの中に新しい価値を再発見しようとする、変り者があってもよからうと思う。<sup>(35)</sup>

太田の反骨精神に関しての随想は「世の光」紙の「太夫浜随想」<sup>(36)</sup>にも多くみられる。自身は変わらないのに、世間——マス・コミや大衆——が、大きく右に行ったり左に行ったりしていると太田は見ている。太田の生涯を貫いた一本の骨太の筋金入り精神は「キリスト教に基づく自由」を求めていたことであった。

## (2) 自由を求めて

太田は、先に記したように、敗戦に関しての挫折はなく、戦後民主主義に基づく自由に期待をかけた。精神的にも混乱する中、いち早く「バイブル・クラス」を部活動として立ち上げ、希望の光をともしとともに、組合活動にも活路を見出そうとした。しかし、そこで太田は、そこには全くの希望がないことを知った。このことについて引用は長くなるが、太田自身に語ってもらう。

「わたしは大阪府立八尾中学校で敗戦を迎えた。戦前、戦中を通じて、ちょうど十年の教師生活の中で、わたしがどのような圧力を受け、非難・中傷を受けて来たか。その一端は拙著『矢と歌』と、『続・矢と歌』(特に後者)に具体的に記録しておいた。

わたしは、神の賜物のうちで、一番すばらしいものは自由であると信じている。この最高の賜物を失ってはならない、どんな圧迫や迫害が加えられようと、非難や中傷をあびせられようと、この賜物だけは敵にあげわたしはならないと、肚を決めて、たたかいつづけた。わたしは信仰の自由を守り抜くためには、職も捨てた。天与の職——天職と信じて打ち込んで来た、教師という本職をも、キリストに従おうとする自由を守るためには、投げうたねばならなかったのだ。

要領のよい同僚たちからは、わたしのような男はバカにも見えたし、ゆうずうのきかない、要領の悪い、石アタマ人間としか思えなかったようだ。

『時勢を考えてみたまえ。ヤソ教の教会への出入りは困るぜ。教師とあろうものが……』と、校長が迫ってくる時、わたしはこの『周囲をキョロキョロと見まわし、時勢におもねりながら生きることしか出来ぬ』人間を實にあわれにも思い、軽蔑もした。こうい

うわけで、わたしは職を追われ（つまり、世間的には敗北し）たが、自由は守り抜いた、という勝利に自分で感動した。

こういう経験をなめていたわたしは、戦後いち早く、教職員組合をつくって、新しく与えられた自由を、さらにたしかなものにしようと思い、親しい同僚によびかけて、いわゆる『教員組合』をつくり、組合が出来ると、当然のこのようにして、五人の執行委員の一人にえらばれた。そこまではよかった。しかし、それが「よかった」と思えなくなるのに、余り長い時間はかからなかった。方々の学校に、次々と組合がつくられた。やがて大阪府下の組合の連合会を作ろう、という呼びかけがあり、わたしたちは学校内で十分に協議を重ねた上で、その方向に向かって進む方針を決めて、その組合連合会の組織のために開かれた会合に、われわれは出席した。

わたしは、その席で、『しまった!』と思った。組合を作ったことは「よかった」という自信を、そこで全く失ってしまった。今もそれをわが生涯の最大の失敗であった、と思っている。自由な民主主義の社会というのは、各人が自由に発言できる、また、自由な発想のできる社会であり、同時に、他人の発言や発想の自由に敬意を表する社会である、とわたしは信じていた。

ところが、前記の集会でわたしが体験したのは何であったか？ そこには次のようなやりとりが行われた。Aがある意見を述べると壇上のXが、『黙れ！ 批判は許さん。これは、本部の指令だッ!!』Bが何か発言すると、壇上のYが、『バッカ野郎。貴様、中央の指令に叛くのかッ』そして、それにつづく野次、怒号はYに向けてではなく、自由な発言をしたBに向かって遠慮なく集中される。ああ、ここには何の自由もないと思った時、わたしは戦前・戦中にも劣らぬ恐ろしい時代——自由の剥奪された社会の到来を感じて身ぶるいした。『ここはわたしのいるべき社会ではない。』わたしはそう信じて、学校に帰って、いろいろの段階を経て、執行部を退き、つづいて組合を脱退した。何ともいえぬ敗北感をどうすることも出来なかった。<sup>(37)</sup>

太田が、府立八尾高校を辞する大きな要因になったのが、この組合活動であった。太田自身は、燈影女学校の岩橋武夫校長の熱心な要請とスキヤキのもてなし<sup>(38)</sup>により転職したとしているが、組合活動への絶望に加えて、希望の光であった「バイブル・クラス」が公立高校における宗教活動とみなされ、GHQにより禁止され——自宅を開放しての「まねび会」を続けたが—— たことが、「信仰の自由を守り抜くため」の転職となったと思われる。

余談になるが、太田は「わたしは、自分のこのにがい経験から、30年余りにわたって、組合運動なるものを、距離をおいて、じっと見つめて来た。一つのイディオロギーが

絶対であり、これに対する『批判は許さん』と言われて、いくじなくも自由を放棄していく人々の哀れな姿を、じっと見つめて来た。『本部の指令』に奴隷の如く従う人々の、表面的に勇ましい鉢巻姿の中に、自由を捨てていく人々のみじめな内面性を見る。<sup>(39)</sup>

ということから、敬和学園で「組合」をつくれば、教育はなくなるとして、教職員組合は作っても良いが、その時は私（太田）は校長をやめるとして、始終警告し続け、現在も組合は作られていない。

## 7. 学習指導要領に見る愛国心

学習指導要領はほぼ10年ごとに改訂されているが、愛国心、君が代、日の丸についてその変遷を要約すると次のようになる。<sup>(40)</sup>

[1950年代]

道徳教育を学校教育のあらゆる機会に行うこととする（'51）。独立国家として、占領時代の違和感の解消／道徳教育の役割、天皇の地位を明記（'55）。

[1960年代]

官報告示により法規性・法的拘束力があるとする解釈を行う／「道徳」の時間の特設による道徳教育の強化（'58より実施）／学校行事、儀式などで国旗掲揚、君が代斉唱が望ましいと記載。中教審「期待される人間像」（'66）

[1970年代]

神話教育の復活と「愛国心」教育の強調（国家を守る自覚、公民的資質の養成の強調など）。

[1980年代]

君が代を「国歌」と明記し、「国旗を掲揚し、国歌を斉唱させることが望ましい」と規定。

[1990年代]

道徳教育を「学校教育の基本にかかわる問題」として拡充し、「畏敬の念」「人間としてのあり方、生き方の教育」を強調／君が代、日の丸について、「望ましい」を「指導するものとする」と変更し、義務づけを強化。

[2010年代]

総則に道徳教育の目標として「我が国と郷土を愛する日本人の育成」が明記／小学校音楽で「君が代を指導する」が「君が代を歌えるよう指導する」に変更。

時代とともに、いわゆる国が指導する「愛国心」教育が強化されてきていることがわかる。特に、2006年に「教育基本法」が改訂<sup>(41)</sup>されたのを受けて現在適用されている指導要領が一番厳しいものとなっている。

この半世紀の変化を太田はどう見るか、興味深い。ただ、反骨精神の旺盛な彼は「神無き教育は、賢い悪魔をつくる」<sup>(42)</sup> だけだと戦前のように極端に右傾化することに対して警告するように思われる。

## 8. 結び

敬和学園高等学校の「日の丸」問題は、ジョン・モス校長（1984－1989）時代は玄関・ロビーに掲げられたが、榎本栄次校長（1990－2003）の時は、掲げられることはなかった。現在の小西二巳夫校長（2004～）は、入学礼拝、卒業礼拝として「式典」ではなく神に捧げる「礼拝」としてこれを位置付けている。

ただ「日の丸・君が代」を伴う愛国心問題は依然として我々の大きな課題であるが、眼の前からそれが除かれてしまっていると意識すらなくしてしまう恐れもある。

「太田俊雄の『愛国心』考」を閉じるにあたって、敬和学園その歩み ―創立10周年記念―（1977.11）巻頭言「われら『神の同労者』たらん」の太田の言葉を引用する。

「しかし、この限りなき『神の恵みといつくしみ』にあずかるためには、絶対に忘れてはならない条件がある。それは『神のおきてを離れて右にも左にも曲がってはならない』（ヨシュア記1章7節）という、神の厳命に従うことである。

わたしは、なまぬるい生き方ができない。最初から祈りつづけて来たことは、もちろん、『敬和学園の教育を助け、導いて下さい』ということだが、『しかし、もし敬和学園の教育が、神の聖名を汚し、神の聖旨にそむいて、〈右や左に曲る〉ようなことがあったら、どうか聖名の栄光のために、学園をつぶして下さい』と祈ることを忘れていない。神は必ず、信じる者の祈りを聴いて下さるであろう。

敬和学園がいつまでも神の祝福を受けつづけることができるためには、わたしたちがこの姿勢をくずさないことである。創立十周年の記念感謝会を開くにあたって、われわれは、この建学の精神を再確認し、新たなる決意をもって次の十年間の第一歩をふみ出したと思う。神のお助けなしには、この敬和学園の教育の成果を十分にあげることは、到底できないであろう。<sup>(43)</sup>

## 【註】

- (1) 敬和学園その歩み ―創立10周年記念― (以下「10年史」という) p103-106
- (2) 1999年7月、「国旗及び国歌に関する法律」が成立したが、この論はそれ以前のため、「日の丸・君が代」を用いる
- (3) 1970年発行の「学校案内」以降、「特徴」に代わって「特色」が用いられている。
- (4) 「10年史」 p106 (ゴシック体は筆者強調)
- (5) 敬和学園高等学校「学校案内」(1970) (ゴシック体は筆者強調)
- (6) 「敬和」第4号 (1967.12発行)
- (7) 同上
- (8) 同上
- (9) 同上
- (10) 「夜業十余年 (29) 愛国心―外遊 (3)」「火の柱」第241号 (S41.6.5)
- (11) 「敬和」第4号 (1967.12発行)
- (12) 「敬和」第107号 (1977.12.1発行)
- (13) 詩篇第137篇「われらは、バビロンの川のほとりに座り、…」
- (14) 「敬和」第107号 (1977.12.1発行)
- (15) 同上
- (16) 「新しい時代の到来 ―北米伝道を終えて― (4) 日本人のために叱られる」「火の柱」第252号 (S42.5.5)
- (17) 「敬和」第5号 (1968.1発行)
- (18) 同上 初稿は「海の外から祖国を見る ―〈アカぬけ〉した人物の養成を」「朝祷」(第407号、1967.12)
- (19) 同上
- (20) 「敬和」第4号 (1967.12発行)
- (21) 同上
- (22) 同上
- (23) 「アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会第6号 (2008.3 73-86p)  
URL : <http://hdl.handle.net/2433/57710>
- (24) ―藤井武選集9より―
- (25) 「新しい時代の到来 ―北米伝道を終えて― (3) 敬和学園の『和』 ―ハワイにて (2) ―「火の柱」第251号 (S42.4.5)
- (26) 「敬和」第4号 (1967.12発行)
- (27) 「敬和」第62号 (1973.3.1発行)
- (28) 「敬和」第215号 (1987.11.1) 及び第217号 (1988.1.1)
- (29) 「敬和」第217号 (1988.1.1)
- (30) 「敬和」第217号 (1988.1.1)
- (31) 「国を思うて何が悪い」阿川弘之 (光文社文庫 1997.11.20) p223
- (32) 「愛国心」田原総一郎・西部邁・姜尚中 (講談社 2003.6.25) p18
- (33) 「敬和」第140号 (1980.12.1)
- (34) 同上
- (35) 「敬和」第29号 (1970.3.1)
- (36) 「みんなが同じ方向に行く時」(第252号 1973.10)、「外国旅行」(第262号 1974.9)、「人生のオリエンテーション」(第284号 1976.9)
- (37) 「敬和」第115号 (1978年11月1日)

- (38) 「続・矢と歌」(聖燈社 1973.12.10発行) p242-243
- (39) 「敬和」 第115号 (1978年11月1日)
- (40) 羽山健一「学習指導要領の変遷」(200612KHK228A2L0170Cより)
- (41) 「教育基本法」 第2条第5項「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」とある。
- (42) 「敬和」 第1号 (1967年9月1日)
- (43) 「われら『神の同労者』たらん」(「十年史」 巻頭言) p3